



ひもとく・理解する・支援する 失行のリハビリテーション

花田 恵介 編

B5・頁 328 2025 年 11 月

定価：4,950 円（本体 4,500 円＋税 10%）[ISBN978-4-260-05585-7] 医学書院刊

網本 和 仙台青葉学院大学教授・リハビリテーション学部長

朝 目覚めると、まずケトルに水を注ぎお湯を沸かし始める。その間にポットの上にコーヒードリッパーに端を折ったペーパーを取り付け、缶からコーヒー粉をすくって入れて、その上に沸いたお湯を静かに注いでいくと、立ち上る香りにやや二日酔いの脳がようやく活動を始める。

このような一日の始まりは、いわばルーティンに行われ、何も考えることなく意識せずに流れていく。ここまで長々と記した行為は、一言でいえば「コーヒーを淹れる」ということである。この日常的で簡単な（ようにみえる）行為であっても、脳障害などが原因で、運動麻痺や感覚障害がない、あるいはそれらが軽微であっても、行うことが困難になる場合がある。この症状を「失行」という。

臨床的にはわかりにくい症状の一つとされる「失行」に関して、四條啜学園大の花田恵介教授編集による本書『ひもとく・理解する・支援する 失行のリハビリテーション』が出版されたことは、旧来の考えから抜け出られていなかった評者にとって驚きの経験となった。本書は、「動作・行為にかかわる神経心理学」、「動作・行為の障害にかかわるニューロサイエンス」、「動作・行為の障害に対するリハビリテーション」、「動作・行為の障害に対する評価」、「動作・行為の障害のある症例への評価とその対応」という全 5 章から構成されている。それぞれの章は、読みやすい 3～4 ページの短い各論で構成されており、例えば第 III 章「動作・行為の障害に対するリハビリテーション」では、「動作・行為の障害に対するリハビリテーションの原則」、「戦略的訓練（Strategy training）と直接的訓練（Direct training）」……と続いていく。基本的な用語の理解から詳細なメカニズム、神経機構の考察、それらを踏まえた臨床症例の例示へと展開される。また、いわゆる古典的な失行症状に加えて、Action disorganization syndrome, Action disinhibition syndrome, Action slip などが取り上げられ、考察がなされている。読者の皆さんは、これらの用語を知っていただろうか。あるいは、これらの症状の関係を理解していただろうか。気になる方は、ぜひ本書をお読みいただきたい。

本書のタイトルにある「ひもとく・理解する・支援する」の意味については「序」に詳しく述べられていて、なかでも「何がこの方の『できなさ』を生んでいるのだろうか？」という問いをもち続け、丁寧に向き合っていくことの大切さこそが重要であるという編者からの指摘は、多くの臨床家にとって、まさに臨床知のかげやきを感じられる一文であるといえよう。目の前の動作・行為が困難な方に対して、どのようにすれば貢献できるのか真剣に悩んでいる皆さんにこそ、ぜひ手に取って読んでいただきたい良書である。